

society&business Tokyo25 journal

25 journal

執筆協力 編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com

秋川とうもろこし焼酎「黄金世代」



のらぼう菜のお味噌汁も JAあきがわが特産品開発

JAあきがわ(坂本勇組合長)は、名産のトウモロコシとのらぼう菜の加工品を完成した。焼酎とインスタント味噌汁で、新たな特産品として秋川ファーマーズセンターなど同JAの直売所で販売されている。

「黄金世代」の銘柄で売り出す秋川産トウモロコシを100%使った本格焼酎は口に広がるトウモロコシのほのかな甘みと鼻に抜けるさわやかな香りが特徴だ。

同JA青壮年部が主体となり、1年前から開発に取り組んだ。焼酎に最適な品種の選定、肥培管理や脱粒作業も自分たちの手で行った。茨城県の剛烈酒造が伝統的な白麹を使い、くせのないやさしい口当たり仕上げた。



720ミリリットルで1200本を製造。アルコール分は25度。定価は1380円(税込)。6月7日には試飲会を行い、商品を広くPRした。「のらぼう菜のお味噌汁」は兵庫県の食品工場に製造を委託し、フリーズドライ製法で仕上げた具沢山の味噌汁。のらぼう菜の風味があふれる一杯だ。ラベルの文字は坂本組合長が筆を握った。1袋150円(同)。

東京西徳洲会病院に 災害用トイレを寄贈



目録が樋口会長(左から4人目)から渡部院長(同7人目)に手渡された

東京徳友会 発会以来支援継続

東京西徳洲会病院(渡部和巨院長、昭島市松原町)に5月25日、自動ラップ式の災害用トイレと付属備品が贈られた。災害時、トイレは感染症の媒介になりやすく、衛生を保つ

ことが大切なことから災害トイレの備蓄は重要性を増している。寄贈したのは医療法人徳洲会の取引業者で組織する東京徳友会(樋口昭久会長)。14年前の発会以来、病院への支援を目的に、役立つものを送り続けている。ただ、新型コロナウイルス感染症の影響で、この2年間は中断。寄贈は3年ぶりとなった。贈呈式には東京徳友会から樋口会長と松永忠夫顧問、病院から渡部院長、皆川孝雄事務部長、鳩山悦子看護部長らが出席。樋口会長からは「開院から18年、地域や東京徳友会、ボランティアの皆さんの応援を受け、病院運営ができています。皆さんの期待に応えられる病院として頑張っていきたい」と感謝した。樋口会長は「コロナ禍、医療現場守ることを目指す。感染症の予防にもなり、後処理の手間が軽減できる」という。東京徳友会では5月30日に武蔵野徳洲会病院(桶川隆嗣院長)にも車いす災害用トイレを寄贈した。

いま「敬天愛人」の志高く

二刀流——医師をしながら老人ホームを運営。その間、青梅市議会議員を4期、都議を通算5期務めた。野村有信氏が27歳で御岳山麓の沢井診療所で働きはじめてから半世紀の活躍には、冒頭の言い方こそがふさわしい。

「父が青梅に来て5年後の1973年に3男の私が生まれた。同年、武尊会を設立。翌年には成木の地に九十九園を開設して

東京武尊会 野村大悟氏



相談にも機敏に対応。4月から飯能市内で病院長にも就任した。「一方、私は少年期から憧れていた芸術家をめざして美大に入った。在学中、ボランティア団体の代表になり、高齢者や障害のある方たちと接するなかで、社会福祉に興味を抱き、父が理事長として指揮をとる武尊会に入職する」

すでに2児をもうけており、幼子をおぶって受付から薬の手渡しまでこなしたという。

有信氏の座右の銘は、敬愛する西郷隆盛の教え「敬天愛人」。つまり、天から授かった使命に生き、無私で人と社会に尽くすこと。議員を退いてもなお都議会自民党常任顧問の任にあり、市民の

黒茶屋

あきる野市小中野167 ☎042-596-0129
令和4年6月の営業
<月曜日を除く全日>
ご昼食(11時~15時受付)
ご夕食(前日迄のご予約制)(17時~19時受付・21時閉店)
<月曜日>
ご昼食のみの営業(11時~15時受付)
定休日:毎週火曜日、および水曜日は不定休

庵

あきる野市小川633 ☎042-559-8080
令和4年6月の営業
<月曜日を除く全日>
ご昼食(11時~15時受付)
ご夕食(前日迄のご予約制)(17時~19時受付・21時閉店)
<月曜日>
ご昼食のみの営業(11時~15時受付)
定休日:毎週火曜日、および水曜日は不定休

井中居

青梅市藤橋2-32 ☎0428-30-1661
令和4年6月の営業
<月曜日を除く全日>
ご昼食(11時~15時受付)
ご夕食(前日迄のご予約制)(17時~19時受付・21時閉店)
<月曜日>
ご昼食のみの営業(11時~15時受付)
定休日:毎週火曜日、および水曜日は不定休
お越しの際はホームページが電話でご確認ください。



父の背中

先代の仕事と教え

「沢井診療所が医師を求めていると知った父は、あえて無医村への赴任を選択。山道を往診に急ぐ父を支えたのが学生結婚をしていた母・康子。